様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：２２７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2014
課題番号：２４７９２５５９

研究課題名（和文）保健・医療・福祉・教育職の発達障害児の判断基準の解明と連携支援システムの構築

研究課題名（英文）A hybrid model of the concept analysis of the multidisciplinary professionals' kininaru-kodomo toward effective collaboration

研究代表者
大河内　彩子（井出彩子）（OKOCHI, Ayako）

横浜市立大学・医学部・准教授

研究者番号：７０５３３０７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：発達障害児との関連が指摘される「気になる子ども」の定義について、ハイブリッドモデルによる概念分析から明らかにした。文献検討での作業的定義の選定、保健師・保育士への半構造化面接による定義の精緻化、実践での有用性の検討からなる。
作業的定義は、発達障害の可能性や親の虐待により特別支援を必要とする子どもである。次に、伸びていける子ども、親支援の必要な子ども、問題がわかりにくい子ども、新しいタイプの子どもという定義も加わった。これらから、当該概念は発達障害児および周辺児の支援ニーズを捉えるのに有用であると示された。今後、診断閾値以下の子どもを支援の土俵に載せるためのスクリーニング尺度開発が必要である。

研究成果の概要（英文）：Children referred to as kininaru-kodomo (KK) by healthcare professionals fall in a gray area of developmental disabilities (DDs). This leaves KK without necessary medical care and special- needs education. This study explores the KK concept to enable professionals to properly assess and provide for the health care needs of these children. For this purpose, a hybrid model of concept analysis was conducted to yield the real and practice-based definition of the concept.
Three themes emerged regarding KK children: (1) children who require special care, (2) children whose characteristics are derived from both individual and environmental factors or who require their special health care needs due to DDs, and (3) children requiring a new support system for themselves or their parents. It is strongly recommended that a screening tool be developed that reflects the concept of KK so that children in this gray area may receive necessary support even before diagnosis.

研究分野：地域看護学

キーワード：気になる子ども　発達障害　児童虐待　ASD　乳幼児健診　連携　概念分析

１．研究開始当初の背景

近年、小児保健や保育や義務教育の現場で「気になる子ども」の存在が話題に上るようになって久しい。文部科学省が平成 24 年 3 月に実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」によると、知的発達に遅れはないものの、学習面又は行動面で著しい困難を示すと担任教員が回答した、児童生徒の割合は全国（宮城・岩手・福島を除く）6.5%（68 万人）にのぼった。「気になる子ども」に含まれると考えられる、いわゆる「軽度発達障害児」は、心身症や学校不適応、社会への不適応という状態に陥ることも少なくなく、支援ニーズが高い存在である。

このように、「気になる子ども」の数の多さと支援ニーズの高さは社会的に問題となっているものの、「気になる子ども」の明確な定義は存在しないまま、現場の支援者の間で使用されてきた。医療者の間では、「気になる子ども」が発達障害を包括する概念であると認識されており、そうした認識は教育や保育の現場でも広まっている。しかし、全ての「気になる子ども」が発達障害と診断されるわけではなく、子どものもつ特性は、発達における個人差や成育環境の不安定さのあらわれと考えられることもある。そのため、専門職の間で子どものどのような点が「気になる」のか、共通認識が持たれておらず、職種によって支援ニーズの評価に違いが生じかねないことが連携上の課題である。

２．研究の目的

「気になる子ども」の増加が指摘される中で、日頃から子どもと関わる保育・教育職が「気になる」とする子どもに対する、保健・医療職からの支援の必要性と支援内容を見極める必要がある。よって、本研究では保健・医療・保育・教育に携わる専門職が「気になる子ども」をどのように認識しているのか、その概念枠組みを明らかにし、連携モデルの構築に向けた示唆を得ることを目的とする。

３．研究の方法

（１）ハイブリッドモデルの概念分析

ハイブリッドモデルによる概念分析[1)]を用いた。この手法は、定義が曖昧な概念を理論的のみならず、実践現場で用いられる概念の意味を反映した定義の作成を目指すものである。理論探索の段階・フィールドワークの段階･最終分析の段階の 3 つの段階からなる。

①理論探索の段階

第1段階として､医学中央雑誌およびCiNii Articles から「気になる子ども」､「気がかりな子」を検索語として得られた文献を検討し、当該概念の作業的定義を明らかにした。

②フィールドワークの段階

第 2 段階として、平成 25 年 12 月翌年 1 月に A 市の保健センター・公立保育園に勤務する保健師 6 名・保育士 6 名を対象とした半構造化面接を行い、逐語録からカテゴリーを作成した。

③最終分析の段階

第 3 段階では第 1 段階および第 2 段階の結果を統合することで、当該概念の実践を踏まえた意味を検討し、当該概念の重要性や看護における有用性を検証した。

（２）倫理的配慮

所属機関の医学部倫理委員会の承認を得た。対象者には調査目的および倫理的配慮について記した文書を用いて口頭で説明し、同意書に署名を得た。

４．研究成果

（１）理論探索の段階で得られた結果

第 1 段階で得られた作業的定義は、発達障害の可能性や親の虐待により特別支援を必要とする子どもであった。気になる子どもは発達障害児と似た行動特性を有し、集団行動での課題があるが、知的な遅れはなく、発達障害の診断は受けていない。また、親の不適切な養育や親の健康状態や経済的問題により、特別支援が必要な子どもでもある[2)]。

表1　第1段階で得られた
「気になる子ども」の作業的定義を構成するカテゴリ

カテゴリ	サブカテゴリ
発達障害が疑われる子ども	発達障害児と同様の行動特性をもつ
	発達の遅れと偏りをもつ
	診断がない
	知的な遅れがない
	就学前児
	性差がある
発達に限らない気がかりが児自身にある子ども	医療的な面
	知的面
	行動面
	情緒面
親の不適切な関わりがある子ども	被児童虐待
	家庭内での不適切な関わり
	親の精神疾患･夫婦関係の難しさ

（２）フィールドワーク段階で得られた結果

第 2 段階では、特別支援を有する子どもという作業的定義に関して伸びていける子ども、親支援の必要な子ども、問題がわかりにくい子ども、新しいタイプの子どもという 4 つのディメンションが得られた。特に保健師からは親支援の必要性が、また、子どもの有する課題が明確ではなく職種間で支援の必要性の判断が異なることや、現状の乳幼児健診のツールで気になる子どもの課題を捉えることの困難性や新しいタイプの障害児であることが語られた。

表2　第2段階で明らかになった保健師にとっての「気になる子ども」概念

カテゴリ	サブカテゴリ
親子をみる中で養育支援が必要と判断される子ども	発達障害と重なりのある感じで気になる子ども 環境特性からの影響を受けている子ども 発達の特性と環境特性の双方から影響を受ける子ども 成長に伴って変わっていく子ども 幼稚園や保育園にとって気になる子ども 母親にとって気になる子ども
親子をみる中で養育支援が必要と判断される母親	子育ての困り感のある母親 子どもに対する暴力的な態度を見せる母親 健診の場には合わない母親 経済状態の苦しい母親 信頼関係に基づく支援の必要な母親

表3　第2段階で得られた保育士にとっての「気になる子ども」概念

カテゴリ	サブカテゴリ
発達の遅れや凸凹のある子ども	言葉の遅れのある子ども 指示を理解していないと推定される子ども 発達は悪くないができないところのある子ども 気になる姿が重なる子ども
集団生活の流れについて来られない子ども	全体への指示の通りに動いていない子ども 多動の子ども 切り替えがうまくいかない子ども 保育士が一緒に動く必要のある子ども
他児とのコミュニケーションが難しい子ども	自分の世界に入っていたい子ども 空気を読めない子ども
できないことがさりげなさすぎる子ども	グレーゾーンの子ども 明らかな発達の遅れがない子ども 乳幼児健診では異常のない子ども
支援ニーズが親や保健医療職からは見えにくい子ども	支援の必要性がきわどすぎて保健医療職には見えにくい子ども 支援が必要なのに必要な支援につながっていない子ども 親は認められないが保育士からの支援が必要な要配慮児
保護者の関わり方が気になる子ども	親のイライラにつながりやすい子ども 親の関わりが希薄な子ども 送り迎えで応答が少ない親 親の病気のある子ども 親が手伝いすぎていた子ども

（3）最終分析の段階で得られた結果

第3段階では、当該概念が発達障害児および周辺児の支援ニーズを捉えるのに有用であることが示された。

ハイブリッドモデルによる概念分析によって、発達障害の可能性に加えて虐待などの環境特性による影響を受けている子どもに対する支援の必要性を保健師や保育士は重要視していることが明らかになった。「気になる子ども」概念は発達障害の診断のついている子どもや何らかの障害を有することが明確な子ども以外を包含するため、診断閾値以下の子どもを支援の土俵に載せるのに有用な概念であり、今後スクリーニング尺度や支援プログラムの開発につながることが必要である。

＜引用文献＞

① Schwartz-Barcott D, Kim HS.: An expansion and elaboration of the hybrid model of concept development. In: Rodgers BL, Knafl KA, editors. Concept development in nursing: Foundations, techniques, and applications. 2nd ed. Edited by Rodgers BL, Knafl KA. Philadelphia: Saunders; 2000. : p. 129-160.

② 大河内彩子, 田高悦子:「気になる子ども」の概念分析－保健・医療・保育・教育職の認識－, 横浜看護学雑誌, 6(1)：1-6, 2014.

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　2　件）

① Okochi A, Tadaka E. The usefulness of the concept of *kininaru-kodomo* (children of concern) in Japan when evaluating children with special health care needs. Annals of Nursing and Practice 2(1): 1021. 2015. http://www.jscimedcentral.com/Nursing/nursing-2-1021.pdf　＜査読有＞

② 大河内彩子, 田高悦子:「気になる子ども」の概念分析－保健・医療・保育・教育職の認識－, 横浜看護学雑誌, 6(1)：1-6, 2014. ＜査読有＞

〔学会発表〕（計　8　件）

① 大河内彩子, 田高 悦子：支援の必要な子ども（CSHCN）の早期把握に向けた保育士　の「気になる子ども」研究, 日本公衆衛生雑誌, 61(10)特別付録：427, 第 73 回日本公衆衛生学会総会, 2014 年 11 月 5 日～7 日, 栃木県総合文化センター（栃木県宇都宮市）.

② 相須史織, 大河内彩子, 田高悦子, 他：発達障害児の母親における診断前の気づきから診断・支援までの過程, 日本公衆衛生雑誌, 61(10)特別付録：407, 第 73 回日本公衆衛生学会総会, 2014 年 11 月 5 日～7 日, 栃木県総合文化センター（栃木県宇都宮市）.

③ 巽奈々, 大河内彩子, 田高悦子, 他：小学校養護教諭が発達障害のある児童に気づき支援を構築する関わりにみる専門性, 日本公衆衛生雑誌, 61(10)特別付録：408, 第 73 回日本公衆衛生学会総会, 2014 年 11 月 5 日～7 日, 栃木県総合文化センター（栃木県宇都宮市）.

④ 松井藍子，大河内彩子，田高悦子，他：発達障害児を持つ母親が子育てにおける肯定的感情を獲得する過程，日本公衆衛生雑誌，61(10)特別付録：407，第 73 回日本公衆衛生学会総会，2014 年 11 月 5 日～7 日，栃木県総合文化センター（栃木県宇都宮市）.

⑤ 大河内彩子，田髙 悦子：行政保健師の「気になる子ども」概念のハイブリッドモデルによる分析―子ども観に焦点を当てて―，日本地域看護学会第 17 回学術集会講演集：110，日本地域看護学会第 17 回学術集会，2014 年 8 月 2 日～3 日，岡山コンベンションセンター（岡山県岡山市）.

⑥Okochi A, Tadaka E: What is diagnosis? : Medicalization of the children with developmental care needs in medical checkups and preschools in Japan, XVIII ISA World Congress of Sociology, Abstract Book of XVIII ISA World Congress of Sociology: 722, 13-19 Jul 2014, Pacifico Yokohama, Yokohama, Kanagawa Prefecture, Japan.

⑦ 大河内彩子，田髙 悦子：保健・医療・保育・教育職の「子ども観」に関する概念分析―効果的な連携に向けて―，第 2 回日本公衆衛生看護学会学術集会講演集：190，第 2 回日本公衆衛生看護学会学術集会，2014 年 1 月 12 日～13 日，国際医療福祉大学小田原保健医療学部(神奈川県小田原市).

⑧ 大河内彩子，田髙 悦子：「気になる子ども」に関する保健・医療職と保育・教育職の認識上の差異と共通項の検討，日本公衆衛生雑誌，60(10)特別付録：382，第 72 回日本公衆衛生学会総会，2013 年 10 月 23 日～25 日，三重県総合文化センター（三重県津市）.

６．研究組織

(1)研究代表者

大河内　彩子（OKOCHI，Ayako）
横浜市立大学・医学研究科・准教授
研究者番号：70533074